

討論・発言 I

山 田 平 太*

歯学概論は、どういう内容をいうか判然としな
いが、歯学史担当者の立場で私見を述べることに
する。

第4回歯科教育審議会（昭和21年、1946）の定
では、歯科大学の標準科目の基礎学科に入り、大
学設置審議会（昭和27年、1952）の定では特別科
目に入っている。

科目から見ると、歯学概論は、現状の歯科基礎
科目と、臨床歯科科目の綜括概要を述べるのが妥
当であって、歯学通論、歯学史概論とは違うので
ある。

歯学概論の語の解釈は明確でないため、歯学史
に包含されるべきであるとの見方からは、歯学史
概論であってもよい筈であるが、この場合は、現
代歯学史概論に限るべきである、と考えている。
歯学概論と歯学史との科目が分立しているので、

双方の間に堺を設ける要があり、この堺をどこに
するか問題となろうが、現在の歯学の状態を述べ
るのが歯学概論で、主として過去の歯学発達を講
ずるのを歯学史と、区別できる。

しかし歴史は、過去、現在、将来と連続した事
項であるから、歯学史で現代事項に及ぶし、歯学
概論で過去のことに論及することはあり得る筈
で、それはそれでよい。原則論として現在と過去
とに区別するのは、一応の便宜的区分であって、
かように明確に限定し得ないものである。

歯学概論で現状の歯学を述べるものとする
と、担当者は一人に限らないで、歯学各科の担当者
にその専門分野を担当させるのも一案であろう。

歯学概論の分野を具体的にいうと、歯学の現
状、歯学の性格、歯科医業の倫理、歯科医師の業
務など、社会歯科学の講述のない場合は、医療と
歯科医療、歯科医師の需給、歯科医師とその補助
者との業務関係を加えてよい、と考えている。

* Heita YAMADA 東京医科歯科大学

討論・発言 II

正 木 正

歯学概論の考え方を論じる前に、歯学という用
語が使われているが、これに対する河村洋二郎教
授の提言による歯科医学に同感である。歯学とは
生物学的意味の歯の学問のことで、歯科医学の
“医”は、病をなおすことであり、また病をなく
すことである。それで、“医”の字を入れて歯科
医学といわねば、歯学では意味をなさない。

拙著 歯科医学概論は、歯学に対するレジスタ
ントの意味で、とくに歯学とせずに歯科医学とし
た。

歯学、歯科学、歯科医学の用語がある。歯科医

学は外形からみると、医学の一分科に属するよう
にみえるが、その内容からは医学から分かれてい
る。しかし、医学の一分科であるとするみかたも
ある。これらのみかたはいずれも正しい。医学の
一分科としては歯科学であり、医学から離れたも
のが歯科医学である。

医学の基礎学は、はじめは解剖学だけであっ
た。古い時代の解剖学のなかにはすべての基礎学
が含まれていた。この解剖学から生理学、衛生学、
病理学などが分離し、さらに今日のように基礎学
が細分科された。臨床医学でも、精神科は精神医

学に、放射線科が放射線医学とその名称を変えている。これらは医学の分科から分離しようとする現われである。

文部省の管轄である教育面では、歯学であり、歯学士とか、歯学博士があるが、歯科医学、あるいは歯科医学博士とはいわない。厚生省の管轄である行政面では、歯科医師であるが、歯師ではない。歯科医師の団体を歯科医師会と呼び、“医”の字が入っている。学会には歯学会と歯科医学会とがある。その内容は、どのように違っているのだろうか。ここに用語の不統一と矛盾がある。

歯科医学概論の考え方、とくにその内容については、人それぞれさまざまで、また歯科医学概論は、体系化されていない。

外国には歯科医学概論の著書はない。New York の Carnegie 財団からの助成金で行なわれた American Association of Dental Schools が、調査した委員会の報告書である A Course of Study in Dentistry. 1935 に、歯科医学概論に相当する歯科医学の位置づけ Orientation in Dentistry のなかには、教授要綱が出ているだけである。

その内容は (1) 歯科医療の目的、(2) 歯科医療で取り扱われる状態、(3) 歯科医療のかたち、(4) 歯科医学教育の様相とそれを学ぶ理由、(5) 歯科医業と他の知的専門職業との接触 (関係)、(6) 歯科医学における学問とその考え方、(7) ど

のようにして歯科医学を学ぶか、(8) 学生の教育環境、(9) 知的専門職業としての歯科医業、(10) 職業人としての歯科医師、(11) 歯科医学の発達史、(12) 歯科医学・歯科医業における情報機関など、となっている。

わたしは、概論を哲学と解し、拙著「歯科医学概論」は歯科医学を哲学的に考え、歯科医学の哲学として歯科医学史の立場から“歯科医学とは何か”、の本質をわたしなりの考えで書いた。これには、異論があろうと思われるが、試論である。

多くの歯科大学、または歯学部では、歯科医学概論 (歯学概論) の講義が行なわれているらしい。この講義は、不文律に、学長、あるいは学部長が担当しているといわれている。これは、戦前に、あたかも、学校長が修身を講じたのに似ている。その発想が、どこにあるのかよく分からないが、前世紀的なきわめて古い考え方のように思われる。

学長とか、あるいは学部長のような激戦にあるものが、歯科医学概論の内容について、果してどれほどの研究ができるのであろうか。

歯科医学概論は、未開拓の分野である。また歯科医学概論は、歯科医学教育の中核ともいうべき最も重要な学科目である。それで、適任者があれば、若い研究心の旺 (おう) 盛な人に講義を担当させねば、歯科医学概論に対する考え方とその内容は、発展しないと思われるが、どうであらうか。